

『カラスの自然史—系統から遊び行動まで』

樋口 広芳・黒沢 令子 編著 北大出版会、2010

A5判、306頁、3,150円（税込み）

ISBN：978-4-8329-8196-6

本書は、カラス類の遺伝学的検証からカラスと人に関わる文化的な側面までが一冊に凝縮された初の総合的な「カラス学」といえる一冊である。

今までもカラス類に関する本は何冊も出版されてきている。その手の本は私の本棚だけでも20冊ほどある。しかしながら、その多くが著者自身の

調査域など比較的狭い範囲の結果の反映にとどまっていたり、人との関わりにおいては多分に情緒的な側面が強調される傾向が強く、科学的かつより網羅的にカラスを対象として論じる本はなかった。

日本では、20年ほど前までは鳥類の研究者も一

般のバードウォッチャーもカラスについてあまり関心がなかったと言えるかもしれない（無論、全く研究者がいなかったわけではない）。関心がなかった……というよりは、捕獲や標識も困難を極めるし、長命だから生活史を完結するまで追跡するには10年、20年という長い調査が必要だし、そして何より人間の生活空間に身近にいて野鳥らしからぬ側面も時として見せるカラスたちは、自然界の仕組みを明らかにすることが科学の崇高(?)な目的とされる風潮のなか取り残されていた感があった。カラス類に全く関心が注がれなかったわけではないが、「野鳥の生態を研究するための対象種」として脚光を浴びる存在ではなかったのである。

それが、この10年ほどでカラスの研究者は着実に増えてきているのである。皮肉にも、その一因として、石原都知事の音頭とりによる、十分なデータに裏打ちされているとはとても言い難い強引な「東京都下のハシブトガラス撲滅作戦」が実施された事もカラス類に対する研究者の関心を引いたことも多分にあるだろう。

「カラスの自然史」に話を戻そう。

私たちの身近にいるハシブトガラスとハシブトガラスであるが、両種はカラス類全体の系統進化的に眺めるとずいぶん異なった進化の道筋を経てきていることが、DNA解析の方法を含め丁寧にわかりやすく説明されている。2章のカラス類の種分化と地理的変異で、さらに一般的な生態学の法則とカラスの体サイズの変異との検討や、頭の高さと進化速度の関連についての考察も興味深い。日本では同所的に生息しているがために十把一からげで「カラス」として扱われてしまうことが多いのが現状だが、進化の歴史を知ればカラス類の見え方も変わってくるのではないだろうか。

ただし、生物学をあまり知らない人でも、DNA解析についてある程度わかるように工夫はされているが、予備知識がないとちょっと理解するのが難しい部分もある。最近、インターネットで丁寧な詳しい説明をしているサイトも増えてきているので、疑問点があればネット検索で遺伝学やDNA解析に関する予備知識を補強しながら読んで良いかもしれない。

農耕地帯のカラス類の繁殖分布とPHSを使った都市部のカラス類の分布・移動パターンは両者の調査手法が異なっており、調査の目的としてい

るところも違う。農耕地帯と比べ、都市部のカラス類のみが大きく移動する傾向があるというわけではないので、都市部におけるカラス類の繁殖分布と農耕地のそれとは本書の中では同じレベルの比較はできない。

カラス類の様々な採食生態に関する章(6~9章)では、彼らが地域の餌資源のありように適応して、いかに上手に利用しているかを垣間見ることができると同時に、生態系の一部としてのカラス類という認知を深めるだろう。野鳥としてのカラス類と彼らとヒトとの接点で見せる行動の両方を知るための優れた客観的な例示の多さは今までの「カラス本」にはない点である。

都市でハシブトガラスが増えた要因として中身のみえない黒いゴミ袋から半透明のゴミ袋に変わったことでゴミ袋の中身が見えやすくなったことを挙げている。それによってハシブトガラスが誘引されたとされている(6章)。しかしながら、札幌では黒ゴミ袋の時代からカラス類はゴミ袋を引き裂きゴミをあさっていたし、個体数自体はゴミ袋の形状が変わっても変化はなかった(Takenaka 2004)。もしかすると、これは東京で特異的に起こった現象であり、必ずしも全ての地域に当てはまるものではない可能性が高い。カラス類の適応能力を考えたときには局地的現象がどれくらい一般化できるのかについても、やはり慎重な比較検討が必要だろう。

カラス類の社会構造や社会行動についての報告も非常に興味深い(10、11章)。ハシブトガラスでは(おそらくハシブトガラスでもそうなのだろう)繁殖なわばりは一年中維持される事実は、今後各地でカラス対策を行う上で大きな示唆を与えてくれるだろう。ここでも注意が必要なのだが、行動的な可塑性の大きいカラス類では社会行動や社会構造にも「地域性」や「地域文化」のような差異があると考えられるので、全ての地域のカラス類の社会行動にあてはまらないものも当然ある。

カラス類を野外で行動観察するのは至難の業である。なにせ、行動範囲は広いし、ほとんどの場合足環はついていない。その隙間を埋める一つの方法として飼育下の行動観察がある。12章は群れ関係や個体認知を明らかにするための飼育下観察、13章は物体や量の識別能力を明らかにするための実験についてである。カラス類のような大型

で野外でのコントロールされた観察が困難な鳥では、飼育下実験や観察が大きな可能性を示している興味深い。特に、ハシブトガラスでは写真のヒトの顔を判別できる事が明らかにされている。ハシブトガラスが繁殖期に自分たちをいたぶる特定の個人を覚えていたみたいだということを経験的に知っている人は「やっぱり」とニヤリとするのではないだろうか。飼育下の観察には限界が当然存在する。その一方で、野外調査にも限界がある。双方のデータを積み上げていく事が今後の「カラス学」の発展に不可欠である事を再認識させられる。

その賢さゆえのカラスの遊び(14章)のバリエーションについては、主に3種のカラス(ハシボソバラス、ハシブトガラス、ワタリガラス)について詳細に述べられている。この章に述べられているように、なぜカラス達が遊ぶのか、どこからどこまでが遊び行動なのかを区別するのは容易ではなく、明快な答えはまだ出ていない。おそらく、カラス類の飼育下および野外における社会行動と社会構造の解明が進むと、遊びの役割や意味づけなどがもっとはっきりしてくるのであろう。鳥類の社会生態学を志す学生さん達にとっては、

とても重要なしかも非常に面白い研究テーマがこの辺にありそうだ。

そして、最終章のカラス類と人間との間の共進化とはどのようなものであったらどうかといった考古学や文化人類学的考察は、焦点をカラスに当ててはいるものの、人と自然環境とは好むと好まざるとに関わらず不可分であり、人の作用があれば自然界からそれに応じた反作用や反応があるものだという事を再考するよい材料を提供してくれる。例えば、里山的な環境を人が作ってきた中でスズメが繁栄し、古来の水田農業によりメダカやフナを水田生態系の優占種となったのも共進化の一側面であろう。それが、カラスとの付き合い方に関しては近年になって大きく変化したという推測はあたっているだろう。

都市化が進む中で、日本の人口の85%以上がすでに都市生活者である。そのような現実の中で、私たちの身近に住む大きな野鳥であるカラスとの相互作用が重要になるという著者らの視点には共感を持てる。

身近な野鳥としてのカラス類を再考する材料としてお奨めの一冊である。

(竹中 万紀子)